

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第6回 第3.1節～第3.2.2節

2018年3月15日

小田 勝

今回から「第3章」に入る。「3.1.2 助動詞の相互承接順序」の70頁の◆について。「(さ)せ-らる」(使役+尊敬)が中古に存しないのは、中古の尊敬の「(ら)る」は静的な動詞にしか承接しなかった(吉田永弘2014)ためである。

「使役受身文」は、中世までの古典文には存しないと考えている(§4.5でも言及)。ただし、軍記物語を中心に、次のような「(さ)せ-らる」の例が存する。

- ① [信頼ハ馬ニ乗ルコトガ出来ズ、侍ニ馬ニ乗セテモラッタ] 信頼鼻血押しのごひ、とかうして馬に乘らせられ、待賢門へ向かはれけり。(平治・金刀比羅本、大系224頁)
- ② 「外より鎖^{ちやう}をさし、供御参らすほかは、人の出で入りあるべからず。…」とぞ仰せ下されける。… [崇徳院ハ] かやうに閉ぢ籠もらせられ給へば(保元・金刀比羅本、大系176頁)
- ③ 左大臣伊通公のなだめ申されけるによつて、死罪一等を減じて、遠流^{きんる}に処せらる。俗は位記をとどめられ、僧は度縁を取りて還俗せさせらる。(平治・古活字本、大系418頁下段)

①は異本に「かきのせられ」とあって本文が疑わしいのだが、この本文を採るなら下線部は「尊敬+尊敬」だろう(「乗る」ように命じられたわけではない)。②も同様に尊敬表現の重複、③の傍点の「らる」は3つともいわゆる主催(公尊敬)の「らる」(吉田永弘2017。本書576頁参照)であろうと思う。使役受身文の確かな例は、近世には存する。

・あいつらに泣かせられることがあるもんか。(浮世風呂・大系145頁)

なお、次のような漢文の表記は、恐らく「引道セ-ラレ-シム」と訓むだろうから、漢文での表現上、また漢文の訓読上「(ら)れ-しむ」という助動詞の連続はあり得ただろう。

・莊嚴父母現在安穩大期之時令被引道(東大寺諷誦文稿109行)

74頁「3.1.2.3 相互承接の違例」の用例(4)(5)に「めり-けり」の例をあげたが、「ける-めり」という用例もあった。

・さばかり色に出ださじと思し召す御気色なりしに、思し召しあまらせ給ひたりける-めり。(源家長日記)

「3.1.3.1 助動詞の2類」の75頁の(2)は、北原保雄氏による助動詞の2分類。この分類法では、「むず」はA類ということになってしまう。

- ・我が詠み集めたる歌どもを三十六番につがひて、伊勢神宮に奉らむずる-なりとて (長秋詠草・詞書)
- ・「たとひ千騎もあれ、万騎もあれ、一方 (=敵陣ノ一方面) は射はらはんずる-なり」とぞ申しける。(保元・古活字本)

「3.2.1 指定辞」の80頁、用例(10)～(15)は、いわゆる「存在の「なり」」の例。変わった例をあげておく。第1例は終止形の例、第2・3例は疑問詞に付いた例である。

- ・富士の山は、この国 (=駿河) なり。(更級)
- ・いづらなる山にかあるらん雁が音の音聞き高く聞こゆるかな (躬恒集・正保四年版本)
- ・どこなりける凡夫境界の者の、鎧武者を鞍ながらこれほど射通すべきぞ。(保元)

81頁の用例(20)～(22)は、断定「なり」の連用形の中止法の例である。次例の「に」は断定「なり」の判断内容を表す連用形 (§10.2.2) と考えられる。

- ・…まして [空蟬ハ源氏トノ関係ヲ] 似げなきことに (=不相応ダト) 思ひて (源・夕顔)
- ・とふことのはじめは今日に (=今日ダト) 見ゆらめど思ふ心は年ぞ経にける (風雅 1002) <詞書「女のもとにはじめてつかはしける」>

同81頁2番目の◆、「なり」の命令形の例を追加する。

- ・[八幡大菩薩ハ] 久に経て君君なれと護るらし人の国よりわが国のため (続古今 705)

「3.2.2 XはYなり」の82頁、用例(7)は「私は～」のような句が表示されていないもの。ここであげたかったのは、現代語の「文法が苦手な私です。」のような、もともと「～は」句が想定されない文であった。下例に差し替える。

- ・世の中を捨てて捨てえぬ心地して都離れぬ我が身なりけり (山家集)
- ・うらなぎに釣りの緒垂れてくる我ぞいたくな立ちそおきつ白波 (兼盛集)

「定義文」の例として、一応次例をあげておく。

- ・十指の爪を切るべし。十指といふは、左右の両手の指の爪なり。(正法眼蔵・洗淨)

[出典追加] 正法眼蔵①道元 (1200-1253) ②1233-53年③岩波文庫/保元物語④古活字本=大系31/躬恒集④正保四年版本=『合本三十六人集』/源家長日記①源家長 (?-1234) ③中世日記紀行文学全評釈集成3

[引用文献追加] 吉田永弘 2014「「る・らる」の尊敬用法の拡張」『説林』62/吉田永弘 2017「尊敬用法の「る・らる」の位置づけ」『國學院雑誌』118-9